

## 土器生産地にみられる成形技法と社会的含意

—タイ東北部ダーン・クウィアンの事例から—

## Pottery Shaping Techniques and the Social Connotations

—The Case of Dan Kwian Pottery Producing in Northeast Thailand—

中村 真理絵

NAKAMURA Marie

The purpose of this paper is to describe and explain the techniques of pottery shaping and their social connotations in the region of Dan Kwian, Northeast Thailand, which is famous among Thai people for its pottery production.

Previous research has set the connection between techniques of pottery shaping and potters in a fixed relationship not taking into consideration the variety of pottery shaping techniques which exist in Dan Kwian. I classify them into “local technique” and “foreign technique” according to the interviews with potters who formed these techniques. I attempt to explain how these techniques have coexisted in Dan Kwian, and reconsider the relation between them and the potters.

“Foreign technique” was mastered by potters from the rural area of Srisaket when they used to work in some villages of famous pottery production. Later it spread out into Dan Kwian when the potters moved there. At first the local Dan Kwian potters saw the “foreign technique” as a threat because the potteries to which it was applied took less time than those made by “local technique”. However, the local Dan Kwian potters gradually distinguished themselves from the Srisaket potters by specializing only in large pots in which they could take advantage of the characteristics of their own techniques.

Then some Dan Kwian potters of “local technique” learnt how to use the “foreign technique” and began to use both techniques at the same time or one of them selectively depending on the types of potteries. As a result of these different backgrounds and opportunity for differentiation, these techniques became an instrument of self-identification for the potters.

It can be concluded that the shaping techniques should not be considered as being invariable and having a fixed relationship with the potters, but should be perceived as flexible and changeable depending on the types of potteries. The social connotations can also be found in the fact that they enable potters to move to different regions.

Further consideration is needed on this flexible and variable pottery making in Dan Kwian considering the broader context of “One Tambon One Product” governmental policy and market.

## 1. はじめに

2006年7月7日から3日間、ナコンラーチャーシーマー県のダーン・クウィアン区にて、「ダー

ン・クウィアンの知恵 土器電飾パレード祭り  
(*ngan mahakam kabuan fai pradap khruelang  
pan din phao withi phumipanya Dan Kwian*)」

が開催された。区役所 (*thesaban*) の周りには屋

台が並び、近隣に住む村人が大勢集まっていた。夜には、荷台を電飾や土器で飾りつけた、ピックアップトラックのパレードをおこなった。また、バンコクから招いた芸能人と、エキストラの村人たちで、昔ながらの土器作りの再現劇を上演し、おおいに盛り上がっていた。そこでは、フェスティバル用に制作されたダーン・クウィアンの PR ビデオも流された<sup>2)</sup>。しかし、映像を見たダーン・クウィアンの成形職人 (*chang pan*) は、「あれはダーン・クウィアンの成形技法 (*withi pan*) ではない。以前もこのように間違えたビデオが作られたことがあった。全然知らない人たちが作るから仕方ないけれど」と、感想を漏らしていた。その成形職人によると、在来の成形技法ではなく、外来の新しい成形技法が映し出されていたのである。

ダーン・クウィアンといえば、タイ人ならば誰もが知っている有名な土器生産地である。2001 年から地方経済振興政策のひとつとしてタイ全土で展開している一村一品政策 (One Tambon One Product=OTOP) では、食料や手工芸品、宝石、ハーブ製品などの地域の特産物を OTOP 製品として登録し、イベント会場や店舗で販売している [武井 2007:167-169, 高梨 2004]。一村一品政策は、1980 年代以降活発化した「地方の知恵」を再評価する動向と関係している。北原によれば、「地方の知恵」が指し示すのは、複合農業の生産・販売の経営能力、民間医療伝承技術など多岐にわたっており、織物や土器などの手工芸品や製作技術なども含まれる [北原 1996: 101-103]。

ダーン・クウィアンの土器も OTOP 製品に登録されており、先の祭りも一村一品政策事業の一環でおこなわれた。このように OTOP 製品に登録されることで、土器製品の流通の機会は増加したが、

それ以前からダーン・クウィアンの土器作りは独自に発展してきた。

ダーン・クウィアンでは、1980 年代までは水甕や食料貯蔵用の壺など素朴な日用品をつくっていたが、現在では、おもに室内外の装飾品といった多様な土器<sup>3)</sup>をつくっている。ダーン・クウィアンの土器は「商業化した手工芸品 (commercialized crafts)」であるとコーヘンが指摘しているように [Cohen 2000:185-187]、仲介業者や近隣の土産物店による注文生産が主で、それが国内外に流通しているのである。土器を注文する際、業者がサイズや模様を指定する。これに応じて職人たちが土器を忠実につくっていく。仲介業者や観光客にとって関心の対象は、土器の作り手が誰か、どのように土器が作られるかではなく、生産地と、完成した製品そのものなのである。だが冒頭のエピソードのように、一見すると同じような土器製品でも、作り手たちは、作り方に関心を向ける。つまり、政策面で活用されるディスコースとしての「地方の知恵」は、職人や村人が考えるものと必ずしも一致するわけではない。ダーン・クウィアンでは、製品のように可視化されない技法は、活用されずに潜在的に残っている。本稿は対外的に可視化されない現場の土器作りとその担い手に焦点をあてるものである。

先行研究を概観すると、まず東北タイの土器作りに関するまとまった研究として思い浮かぶのが、コートやレファーツ、檜崎ら人類学者と考古学者による共同研究である [Cort et al. 2000]。彼らは 1993 年から 1999 年にかけて 6 度にわたり、東南アジア大陸部、特に東北タイを中心に、土器作りに関する広域調査をおこなった。

焼締陶を含む土器作りの生産地を網羅的に調査

し、用いられている技法の分布、民族性や性別といった生産者の属性、分業体制を示した。これは技法の多様性とその分布、およびその生産者の民族の重なりを解明する試みであったが、実はこの研究では、ある技法をある民族が継承しているという、技法と担い手の対応関係を前提として、「人の移動＝土器作りの技法の伝播」として記述している。たとえば、本稿の対象となる地域に関する箇所では、タイ・コラートの人々は男性が焼締陶作り、そして女性が土器作りをしているとして、民族と性別と技法が対応関係を持つものとして静態的に図式化されている [Cort *et al.* 2000:150]。

しかしながら、コートらも述べているように、技法は民族に関係なく習得できる [Cort *et al.* 2000:150]。実際、現在のダーン・クウィアンには、複数の成形の技法が併存しており、そうした成形技法を担う職人たちには、さまざまな社会集団に属する人がいる。本稿では、ダーン・クウィアンの土器作りの製作工程のなかでも、特に成形段階に着目し、成形技法と担い手の対応関係をめぐる従来の視点を修正する。ダーン・クウィアンの土器の製作工程は、粘土の準備、成形、彫刻、窯による焼成、彩色という順である。成形段階に着目するのは、土器作りの製作工程において、小工程や道具という技術要素が多様であり、社会背景との関連から分析するのに適しているからである。

なお、本稿は、2005年7月から2006年8月にかけて、ナコンラーチャシーマー県チョコチャイ郡ダーン・クウィアン区C村において行った現地調査の成果である<sup>4)</sup>。本文中にあるインフォーマントの年齢などは、調査当時である2006年のものである。

次に調査地の概要を説明する。ナコンラーチャシーマー県（通称コラート）の市街地から幹線道路を南へ15kmほど進むと、道路沿いに土器などを売る小さい土産物屋が110店舗ほど並んでいる。クメール遺跡とされるパノムルン遺跡やピマーイ遺跡などを訪れるバスツアーも立ち寄るからである。その幹線道路沿いからわき道の奥に入ったところが、村人たちの生活空間であり、土器生産の場でもある。

「ダーン・クウィアン (*Dan Kwian*)」とは「牛車の通る道」という意味がある。行商用の荷を積んだ牛車が通行する場所であったことから、このように呼ばれるようになった。牛車はダーン・クウィアンの土器を運ぶ際にも使われていた。地理的には、C村の集落にメコン川支流のムーン川が通っており、この川が土器作りに適した粘土を水田一帯に運んでいるのである。ダーン・クウィアンで土器がつくられるようになった時期は、定かではない。言い伝えによると、約250年から300年前に、カンボジアとタイとの国境近くからモン・クメール系の人々が牛車に乗って旅をし、このあたりに立ち寄ったことがきっかけで、土器作りが伝わったとされている [Tesaban Tambon Dan Kwian 発行年不明 a:3-9,b]。現在では、「ダーン・クウィアン」は行政区 (*tambon*) の名称として用いられているが、タイの一般の人々の認識では、ダーン・クウィアンといえば土器生産地の名称のことである。

コートらの調査当時、東北タイで土器作りは約50カ村でおこなわれていた。だが、筆者が日本人考古学者と共に2005年8月に約10日間おこなった広域調査によれば、10カ村程度に減少している。このように急速に土器作りが減少した理由には、

アルミニウム製品など代替品が普及して日用品としての土器の需要が急減したこと、土器作りの後継者不足などがある。

こうした状況にあつて、本稿で取り扱うダーン・クウィアンのような土器作りの拡大はめずらしい。ダーン・クウィアンでも、1980年代には自然釉のかかった黒い焼締陶の水甕、料理用鉢、そして食糧貯蔵用の甕などの日用品を作っていた。しかし、タイの多くの焼締陶を含む土器作りが衰退するなか、ダーン・クウィアンは、表面に彫刻が施された室内外の装飾品、土製のタイル、クメール遺跡をモチーフとした壁画や土製のアクセサリなど、多様な製品を作ることによって生産を拡大してきた [Chimnakom 1999]。現在では、焼成した後に彩色する際、顔料を浸透させるため、焼成温度の低い素焼きの土器を多くつくるようになっている。また職人も徐々に増加し、分業化や作業の一部の機械化などの、製作工程の変化もすすんでいる。

ダーン・クウィアン区は13の村落からなり、土器作りを営んでいる人々は、行政区に含まれる10ヵ村に広がって生活している。本稿では、特にそのなかでも土器作りに関わっている世帯の割合の高いC村を調査村としている。C村では、世帯数147戸、人口743人、世帯の約70%が土器作りに関連した職業についている。工房は38軒あり、窯は28基で、窯を持っていない工房は、他の工房の窯を使わせてもらっている。成形職人の数は男性49名、うちダーン・クウィアン出身者は38名、外からやってきたのは11名である。彫刻職人は58名でありそのうちの約70%が女性である。先に、タイ・コラートの人々は焼締陶を男性がつくり、土器を女性がつくるとされている、と述べたが、C村の成形職人は男性である。それは、以前は焼

締陶を作っていた男性たちが、焼成温度の低い土器作り職人にそのまま変わったからである。女性が成形をしてはいけないという明確な規範があるわけではなく、実際に現在50歳代の女性2人は体力的限界を感じる5年ほど前まで、成形をしていたという。

図-1 調査地の地図



A・・・コラート市街へ、B・・・土産物屋、C・・・調査地 C村 [google.map より筆者作成]

## 2. 併存するふたつの技法

ここでは、C村の成形職人たちによる成形技法の説明に基づき、ダーン・クウィアンにおける「在来の成形技法」と「外来の成形技法」に分けて、その技法と特色を整理する。既存の研究でも、ダーン・クウィアンの土器作りの製作技法を研究したものがある [Kancanaphan 1962, Khokkhunthot 1987, Sinyabut 1999]。それらの調査時には、まだダーン・クウィアンの外から新たな技法が入ってきておらず、成形段階についても在来の成形技法のみが扱われており、現在のよう

に複数の成形技法が併存している状況について扱っていない。

### (1) 在来の成形技法

在来の成形技法の手順は以下のとおりである。

①粘土を底部用と胴部用との塊にする。

写真-1 粘土を塊にする



②タイル製または木製の成形板をろくろの円盤の上に粘土で固定する。回転台を回しながら、成形板の上に砂を敷く。底部用の粘土の塊をおき、手で叩いて底部をつくる。

写真-2 底部をつくる



③棒状の粘土の塊を右手に持ち、左手を添えながら板状に伸ばし、側面を円筒状に積み上げていく。

写真-3 側面を円筒状にする



④電動ろくろにスイッチを入れて、形を整える。ろくろは上から見て右回りである。電動ろくろを使うようになったのは、約10年前であり、現在も電動ろくろを使わず、手回しの回転台を使う職人もいる。回転台を用いる場合は回転台を回す補助の人がつく。

写真-4 電動ろくろを用いて形を整える



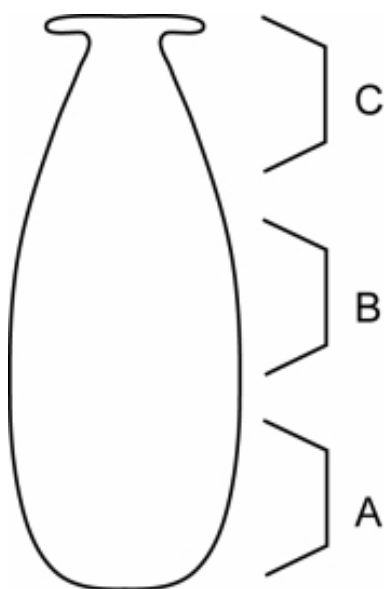
⑤成形板ごと土器を持ち上げて、乾燥場所へ移動させる。

写真-5 成形板ごと移動させる



⑥大型の土器をつくる場合は、A の部分を乾燥させ、B の部分、C の部分と積み上げていく（図-2 参照）。B、C の部分をつくる作業は③から⑤までの作業を繰り返し、A、B、C を成形する間に乾燥段階をはさむ。

図-2 土器の部位



## (2) 外来の成形技法

外来の成形技法の手順は以下のとおりである。

①助手が粘土を適度な大きさに切り分け、その粘土を木の叩き台に叩きつけ塊にする。

写真-6 叩き台で粘土を塊にする



②職人が粘土をろくろの円盤に直接おき、両手で一気に成形する。電動ろくろは常に回っている。

写真-7 電動ろくろで成形する



③成形後、土器とろくろ円盤の間に糸を通し、土器をろくろから切り離す。

写真-8 糸切りして土器をろくろから切り離す



④助手が土器を乾燥場所へ移動させる。

**(3) 在来の成形技法と外来の成形技法の違い**

在来と外来の成形技法の違いを簡単にまとめたのが、表-1 になる。

これが、職人たちの説明に基づく在来の成形技法と外来の成形技法である。職人達が、とくにそれぞれの技法の特徴としてよく口にするのは、ろくろの回転方向と、作る土器のサイズの違いである。ろくろの回転は、在来の技法では上からみて右回り、外来の技法では左回りである。また、在来の技法より、外来の技法の方が成形速度がはやい反面、成形できるサイズに限界があるとされる。だが、技術的には、外来の成形技法でもある程度大型の土器を作ることはできるという話もある。現時点で筆者は、「外来の技法では、成形サイズに限界がある」という語りは、在来の成形技法を維持していくために職人たちがよく使う定式化された説明に過ぎないと考えている。なお、一般的に大きい土器とは、だいたい 22 インチ (約 55cm) を超えるものを指している。次節では、それらふたつの技法を担っている職人たちについて取り上げたい。

表-1 成形技法の違い

	在来の成形技法		外来の成形技法
技法の種類	紐積み水挽き		粘土塊水挽き
土器のサイズ	大型土器		小型土器
作業姿勢 (座位)	土器のサイズに合わせ変化 あぐら、小さい椅子に座る		高い位置に腰掛けて 前傾姿勢で作業
ろくろ等	手回し回転台	電動ろくろ	電動ろくろ
ろくろの回転	右まわり	右まわり	左まわり
作業人数	2人 (成形職人と回転台を 回す人)	1人	2人 (成形職人と助手)

### 3. 成形技法を担う職人たち

「職人」はタイ語で「チャン (*chang*)」と呼ぶが、これは何かしらの特別な技術を持っている人々のことである[森田 2007:498-499]。機械工や美容師などもチャンと呼ばれる。ダーン・クウィアンの土器作りの作業においてチャンと呼ばれるのは、成形を担う人々と、彫刻を担う人々のみである。焼成を担う人は「焼く人 (*khon pao*)」と呼ばれる。ここで取り扱うのは成形職人である。

#### (1) 在来の成形技法を担う職人たち

在来の成形技法で土器を作っているのは、C村あるいは近隣の村出身の成形職人たちである。自分の工房を持つ者もいれば、工房に雇われている者もいる。

10代から70歳代までの人々が、成形職人として働いている。30歳代後半以上の職人は約20年前には農業と兼業していたが、土器製品の需要が増えるにしたがって、農業をやめ、土器作りに特化した。こうした職人は成形以外の作業工程である粘土の準備や、焼成などの技術も持っている。一方で、若い世代の職人たちの技術は、成形職人は成形のみ、彫刻職人は彫刻のみに限定されている。ダーン・クウィアンの土器作りの活発化に伴い、工程内分業がすすんだのである。

C村から5kmはなれた場所にスラナリー工業団地<sup>5)</sup>がある。ここには、日系企業をはじめとする外資系企業の工場が誘致されている。1990年代以降、近隣の村の若者たちが工場労働者として工業団地で働くようになり、調査地に住む若者の中にもここで働く者がいる。また、現在、成形職人として働く者の中でも5人程が工業団地で働いた

経験を持っていた。それぞれ工場で、半年から3年程度働いた後、工場を辞めて、ダーン・クウィアンで土器作りに従事するようになっている。彼らとその理由として決まってあげるのは、「工場で働くとは時間に自由がないが、ダーン・クウィアンでは自由に働ける」ということである。彼らは一様に、「自由(*isara*)」に働くことの重要性を唱える。

このように現地の職人たちにとって土器作りは常に身近な存在である。若い人にとっては、他の仕事をしていて辞めたとしても、村で土器作りの仕事の手伝いをすれば生活できるという安心感がある。

#### (2) 外来の成形技法を担う職人たち

外来の成形技法を担うのは、ダーン・クウィアンの外の地域からやってきた成形職人たちである。成形職人49名のうち11名が、外からやってきた職人であり、うち9名がC村から東へ約200km離れたシーサケット県のS村かS村に隣接するT村から出稼ぎに来ており、20歳代から30歳代の若者である。彼らの出身村は街から離れていて、実家は農業を営んでいるが、現金収入が十分ではないため、父親が建設業などの出稼ぎをして収入を得る世帯ばかりである。

シーサケット県の村人でこのように土器作りに携わっているのは、現在40歳代より若い世代の人々である。そのきっかけは、現在40歳代後半の第一世代の中の1人の男性が、ノンタブリー県の土器作りで有名なクレッド地域へ働きに行ったことである。クレッド地域は、バンコクから北へ20kmほどのところに位置し、なかでもチャオプラヤー川の中州であり、モン族(Mon)のいるクレッド島は、土器作りが盛んである。数人の村人



がクレッド地域の土器工場で働き、技法を習得した後、少しでもよい雇用条件や収入の高い土器生産地を求めて各地を転々とするようになった。他の土器生産地の情報を、親族や友達から収集し、誘い合って働きに出るという。ダーン・クウィアンでは、工房内に住むか、村のなかに部屋を借りて住んでいる。また、外来の成形技法では粘土の準備をする人手がいるので、彼らの多くは助手として妻を伴って出稼ぎに来ている。

こうしたシーサケット県出身の外来の成形職人たちは、土器作りを出稼ぎによるひとつの生計手段として捉えているのである。ある成形職人（35歳）は、クレッド地域で7年、ラップリーで5年、アントーンで3年を経て、ダーン・クウィアンで働いている。彼のように複数の土器生産地を転々と出稼ぎをする成形職人はめずらしくない。彼らにとって、ダーン・クウィアンはその他の土器生産地と同じように通過点にしかすぎない。

このように、出身地が異なる成形職人がダーン・クウィアンで働くことは、在来の成形職人にどのような影響を与えたのだろうか。シーサケット県出身の成形職人が新しく技法を持って来た時の驚きを、ダーン・クウィアン出身のある成形職人（30歳）は次のように語っている。

「シーサケットの成形職人がやってきて、初めて彼らの成形技法を見たときは、びっくりしました。何しろ、成形するのがとても早く見えたからです。僕たちは、あのように早く成形することはできない、と思いました。でも次第に、彼らは大型土器を作ることはできない、ということに気づきました。彼らは小型土器しか作れないけれども、僕たちは両方作れるのです。でも、今は小型土器のほとんどを、彼らが作っています。僕たちは大

型土器を中心に作るようになりました」。

このように、ダーン・クウィアン在来の成形職人は、初めて外来の技法を見たときに、その速さを脅威に感じたものの、徐々にお互いの技法の特徴を見定め、それらをいかしたサイズの土器を作ることで棲み分けていったのである。

#### 4. 成形職人の流入による影響

前節まで、それぞれの成形技法とそれを担う職人たちの社会背景に注目し、シーサケット県出身の外来の成形職人の流入により、土器生産地にふたつの成形技法が併存するに至ったことを述べた。都市近郊農村ではあるものの、C村にその土地以外の者が住むことは、すんなりと受け入れられたのだろうか。本節では、(1) 職人たちの語りにもられる職人同士による互いの差異化と、(2) 新しく外来の技法を習得したダーン・クウィアン在来の成形職人の事例から、外来の成形職人たちが流入したことによる影響を検討したい。

##### (1) 職人同士による互いの差異化

12月、東北タイは稲刈りの季節である。その頃になると、ダーン・クウィアンへ出稼ぎに来ているシーサケット県の農村からやってきた職人たちは、次々と里帰りをしてしまう。彼らの実家は農業を営んでいるので、12月には刈り入れの手伝いをしに実家に戻ってしまうのである。ダーン・クウィアンのある彫刻職人（女性45歳）は「クメールの職人たちが帰郷をすると、私たちの仕事がなくなってしまうから困る」と、愚痴をこぼしていた。彫刻の作業は、成形の作業が終了しないと成り立たない。このように外来の成形職人たちが帰

省すると、彫刻職人の仕事がなくなり、出来高制でもらう収入が減ってしまうのである。それがこうした不満を引き起こすことになる。彫刻職人は、「ダーン・クウィアンの成形職人ならば、このような仕事の仕方はしない」と成形職人の比較をする。

また、働き方について、シーサケット県出身の成形職人たちがダーン・クウィアンの成形職人たちと異なるのは、工房の掛け持ちの有無である。外来の成形職人たちは、基本的にそれぞれ一ヶ所の工房で働いているが、仕事がないときに別の工房で数日間、働くことがある。工房の持ち主によっては、こうした掛け持ちをよく思わない人もおり、規模の大きな工房では禁止されている<sup>6)</sup>。だが、C村の工房は小規模であり、掛け持ちで働くことを禁止していない。ある外来の成形職人(36歳)は「自分の働いている工房の仕事がないときには、工房の持ち主の甥の工房に手伝いに行くか、隣の工場の手伝いに行きます。その時には、必ず工房の持ち主に一言断らなくてははいけません」と言う。工房を掛け持ちする際には優先順位があり、それは、工房の持ち主の親戚の工房や親しい工房が優先される。一方、ダーン・クウィアンの在来の職人たちは、外来の成形職人のように工房を掛け持ちして働くことは、工房の持ち主への遠慮からできないと述べる。こうした在来の成形職人と外来の成形職人の働き方の違いは、ダーン・クウィアンに今後も住み続けるか、あるいは一時的に働くために住んでいるのかという、立場と状況の違いに起因すると考えられる。そうした立場の違いから、外来の成形職人たちは在来の成形職人たちとは異なる規範で働いている。ダーン・クウィアンの職人たちは、外来の成形職人たちは工房の人間

関係を考慮しない働き方をすると捉えるが、外来の成形職人たちは、彼らなりの規範に従って働いているのである。

だが、外来の成形職人たちが仕事のない時に他の工房に働きに行く理由は、彼らの立場や状況によってのみ、説明付けられるわけではない。おもに小型土器を作っている外来の成形職人は、一日で仕事を完結させることができ、他の工房との掛け持ちが可能であるが、大型土器を作っている在来の成形職人は、1つの土器を成形するのに2-3日かかってしまう。このことから、在来の成形職人にとって、工房を掛け持ちするのは時間的に難しい。つまり、ダーン・クウィアンの成形職人と外来の成形職人の働き方の違いは、出稼ぎの一時滞在者として働く職人と、地元で働く職人という立場に関係すると同時に、技法の特質、つまり土器を作るのに費やす時間にも関係しているのである。

ここで補足しておきたいのは、ダーン・クウィアンの職人たちが、外来の成形職人たちに言及するときのいくつかの呼び方についてである。シーサケット県から職人たちが来たばかりで、ダーン・クウィアンの職人が、まだ彼らのことをよく知らなかった頃、「クメールの職人」と呼んでいた。しかし、時間がたつにつれて、「水挽き職人」と技法の名前で彼らを呼ぶようになった。こうした呼び方の違いは、彼らの親しさや距離感を示すひとつの指標だといえよう。例えば、普段は「水挽き職人」や「シーサケットの職人」と呼んでいるが、愚痴を言うときにしばしば「クメールの職人」と呼んだりする。愚痴をこぼすときは、その距離感が表にあらわれる瞬間だといえる。

異なる社会背景を持つ成形職人たちは土器作り

に従事することにより同じ村に住むことになるわけだが、立場の差や仕事への取り組み方に違いがあり、その違いが職人同士をお互いに意識させることになる。

## (2) 外来の技法を習得した在来の職人たち

3 節と 4 節で述べたように、在来の成形技法はダーン・クウィアの成形職人たちが、外来の成形技法は、出稼ぎで成形技法を習得したシーサケット県出身の職人たちが担う、という対応がみられた。ここではコートらが想定していた、技法と、その担い手の社会集団との対応の枠組みが読み取れるように見える。しかし、そう結論できるのだろうか。この点をもう少し詳細に分析するために、外来の技法を習得したダーン・クウィアの職人たちに注目してみたい。

C 村のある工房には、在来の成形職人が 3 人働いている。現在 46 歳の成形職人が工房の持ち主である。あとの二人は、彼の配偶者の弟たちである。この工房は大型土器のオーダーを受けて作っている。成形は 1 回では終わらず、2 回あるいは 3 回と繰り返さなくてはならない。

この 3 人に共通してみられる成形技法の特徴は、土器の下部 (図・1 A の部分) を成形する際に、外来の成形技法を用いる一方で、2 回目 (B の部分)、3 回目 (C の部分) の成形をする際には、在来の成形技法を用いる点にある。その理由として、彼らは A の部分を成形するときに、外来の成形技法を用いるほうが、時間を短縮できるからだと説明する。

以前、同じ工房でシーサケット県出身の成形職人が働いていたことがあり、それを見ながら 3 人は新しい技法を習得した。その時のことを職人

D (36 歳) は次のように語る。「彼らの技法を習得してみようと思ったのは、やってみたらできるかもしれないと思ったからです。僕たちのように、すでに粘土の扱いを知っている者が、新しく技法を習得することは、それほど困難ではありません。仕事の合間に一ヶ月ほど、練習していたら、問題なくできるようになりました」<sup>7)</sup>。

元来なかった外来の技法を習得してそれを用いることで、作業時間の短縮化をはかっている職人は、C 村においては、この工房の職人たちだけである。

ある日のこと、職人 D は、新しくオーダーの入った洗面器型の土器を作り始めた。このとき、いつも通り、A の部分を外来の成形技法を用いて成形し、底を糸切りし、乾燥場所に移動させようと土器を素手で持ち上げた。すると土器の重量に耐えられずに、土器の形が変形してしまったのである。彼はさらに 2 度、同じことを繰り返すが、結局失敗してしまい、外来の技法を用いることをあきらめ、在来の技法に切り替えて成形することにした。

外来の技法と在来の技法との違いのひとつは、成形終了後に底の処理をどうするかという点にある。外来の技法の場合、ろくろの円盤に直接粘土をおくので、成形終了後、土器の底部と円盤を離すのに糸を通すという「糸切り」の作業が必要である (写真・8)。一方、在来の技法の場合は、ろくろの円盤の上に木の板あるいはタイルを乗せ、その上に砂を敷いて、粘土が付着しないようにしている (写真・2)。成形終了後、土器を移動させるときには、その板をそのまま持ち上げればよいので、土器はゆがまないのである (写真・5)。

職人 D は、最近作っていない形の土器を注文さ

れ、とまどってしまった。最初は、いつも通り、外来の技法と在来の技法の両方を使って成形してみたが、慣れておらずうまく作れなかった。彼によると、外来の技法の方が早くできるので、できれば外来の技法を用いて成形したかったが、注文は幅が広くしかも大きい洗面器型だったので、素手で運ぶときに手にかかる重量でゆがんでしまった。そこで、タイルを底部にしくことで土器に負担をかけずに運ぶことのできる在来の技法のみで作った。職人Dは、このように作る土器によって、ふたつの技法を使い分けているのである。

## 5. おわりに

本稿では、土器作りをめぐる、技法と、その担い手の社会集団にはっきりとした対応関係があるという従来の視点を検討するため、ダーン・クウィアンでみられる複数の成形技法に焦点を当ててきた。

外来の成形技法は、東北タイのシーサケット県農村出身の人々が、複数の土器生産地にて出稼ぎをする間に習得し、その後、彼らがダーン・クウィアンに流入した際に持ち込まれた。流入当初、この技法は、在来の成形技法を担うダーン・クウィアンの職人にとって脅威として映った。というのは、外来の成形技法は在来の成形技法よりも土器成形の速度が速かったからである。しかし、在来の成形技法を担う職人たちは、次第に、彼ら自身の技法の特質を活かし、大型土器のみを作ることにより、外来の成形技法を担う職人との、棲み分けを図っていった。

さらに一部の工房では、在来の成形技法を担うダーン・クウィアンの職人が、外来の成形技法も

習得し、土器の種類によっては、両方の技法を併せて用いたり、使い分けたりする例もみられる。以上から、技法と担い手の関係は固定的なものではなく、土器の形や大きさという製品の形状に応じた使い分けの可能性がある、どの技法を用いるかは職人個人の資質と意志によることを示した。ここから、土器生産地における職人と技法との関係を動的に理解すべきことが導かれる。その職人と技法の関係の在り方が「外来の技法」を担う職人の移動をも可能にしている。

さらに、複数の成形技法の併存は、多様化する市場に対して生産する土器における棲み分けを行うという、職人の戦略的行動と結びついている。それゆえに、外来の技法を学ぶ在来の職人に、他の職人や村人から感情的な反発があるわけではない。ダーン・クウィアンの土器自体が、市場の要求に応じて、常に変化していることが、職人の柔軟性の証である。

また、地域の外から異なる技法をもつ職人が流入してきたことで、現地の職人が在来の技法を認識する機会となり、技法が自己を差異化する指標となった。したがって職人達は、技法の違いを職人集団間の違いのアナロジーとして表現することがある。冒頭のエピソードのように、自分たちの用いている成形技法こそが、ダーン・クウィアンの成形技法であるという主張は、自らのアイデンティティを示す役割として技法が機能している場面でもある。だが、技法はアイデンティティを示すものの、ダーン・クウィアンの職人と外来の職人とが、お互いの差異を表明する際に用いられており、対外的なダーン・クウィアンのアイデンティティとはなっていない。

今後、さらなる検討が必要だが、ダーン・ク

イアンの土器作りには、常に消費者好みの斬新な土器をつくるための新たな技法や、革新をおこなう職人の能力が伴っていると考えられる。そのため、職人 D が二つの技法を融合したように、新たな成形技法が生み出される可能性もあるだろう。

本稿で取り上げたダーン・クウィアンにおける事例は、一村一品政策が展開しているタイ農村部における手工業生産の現状の一端を示している。これまで、可視化されない地方の知恵として成形技法に関する議論を進めてきたが、そこには技法の「在来」と「外来」をめぐる差異や職人同士の互いの差異化がみられた。こうした差異は、一村一品政策、市場、土器作りの現場、職人の社会関係などの文脈に応じて多様であり、流動的なものである。だが、土器作りの現場や社会関係の場に生じる差異は、作り手である職人が自己を同定する契機となり、今後、市場や政策の文脈で表明される「地方の知恵」を作り出す資源となりうる。それらが組織化され、対外的な産地イメージや政策的言説に組み立てられていく過程は、今後重要な課題となるだろう。

## 【引用文献】

- Chimnakom, Eddee. 1999. *Inside Dan Kwean Pottery Village*. Bangkok:Benja International NTD Part.
- Cohen, Erik. 2000. *The Commercialized Crafts of Thailand: Hill Tribes and Lowland Villages : Collected Articles (Consumasian Book Series)*.Honolulu:University of Hawaii Press.
- Cort, Louis Allison、榎崎彰一、Lefferts, H.Leedom. 2000. 「東南アジアにおける現代の土器および焼締陶の生産に関する地域調査」(佐藤サアラ訳)『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要』8:106-192.
- Kanchanaphan, Suraphon. 1962. *Kan Tham Khrueng Pan Din Phao thi Dan Kwian* (『ダーン・クウィアンにおける土器作り』). Mahawitthayalai Sinlapakon.
- Khokkhunhot, Chaloechai. 1987. *Utsahakam Khrueng Pan Din Phao kap khwam Plianplaeng thang Sangkhom lae Setthakit khong Chumchon Dan Kwian Pho.So. 2484-2526* (『1941年から

## 【注】

- ① ここで再現されていたのは、現代の土器作りのように電動ろくろや粘土を細かく砕く土練機を用いない土器作りと、牛車で人が行きかう村の様子である。
- ② PR用のビデオは映像制作プロダクションに外注して、制作されたものである。
- ③ 土器はタイ語で「*khruang*(器)・*pan*(成形)・*din*(土)・*pao*(焼く)」と呼ばれる。
- ④ 本調査は、平成 16 年度文部科学省アジア諸国長期留学生派遣制度の支援を得て、マヒドン大学に受入を許可していただくことで可能になったものである。尚、本稿に載せている写真は全て筆者撮影である。
- ⑤ スラナリー工業団地(Suranaree Industrial Zone)は、1987年に建設が開始された。現在ある約 80 の外資系企業のうち、8割が日系企業である。
- ⑥ C村にはないが他村にある、職人 50人以上が働くような比較的規模の大きい工場では、他の工房や工場で働くことは許されていない。C村の工房のほとんどが家族中心に運営されており、2~10人程度の小規模なものである。
- ⑦ 成形職人たちの土器作りの成形技法に対する共通認識は、それほど難しいものではない、というものである。成形技法の習得は、忍耐力さえあれば大抵誰でもできるようになるという。

1987 年におけるダーン・クウィアの土器産業と社会経済的変容』). Chulalongkon Mahawitthayalai.

北原淳 1996.『共同体の思想—村落開発理論の比較社会学』世界思想社.

森田敦郎 2007.「機械と社会集団の相互構成：タイにおける農業機械技術の発展と職業集団の形成」『文化人類学』71(4):491-517.

Sinyabut, Suphachai. 1999. *Kan Sueksa Priapthiap Laksana Rupbaep Sinlapa lae kan Chatkan Khrueang Pan Din Phao Dan Kwian Ampoe Chokchai Nakhon Ratchashima kap Ban Mo Ampoe Mueang Maha Sarakam* (『ナコンラーチャシーマー県チョクチャイ郡ダーン・クウィアンとマハーサーラカーム県ムアン郡モー村の土器の様式と運営に関する比較研究』). Mahawitthayalai Maha Sarakham.

高梨和紘 2004.「OTOP プロジェクトとタイ東北部経済」『世界経済評論』4:22-33.

武井泉 2007.「タイにおける一村一品運動と農村家計・経済への影響」『高崎経済大学論集』49 (3・4):167-180.

Tesaban Tambon Dan Kwian, 発行年不明 a. *Phaen Phatana Sam Phi(Pho.So.2549-2551)* (3年開発計画 2006年から2008年) *Thesaban Tambon Dan Kwian Amphoe Chokchai Chanwat Nakhon Ratchasima*.

---

発行年不明b. *Khrueang Pan Yuk "Phumipanya Thong Thin Su Sakon"* (土器‘世界に向かう地方の知恵’).